「キリストを土台として」　聖徒の日・永眠者記念日　　２０２２年１１月６日

コリントの信徒への手紙一３：１０～１５

佐々木　佐余子

このコリントの信徒への手紙を執筆したころは、第 3 回目の伝道旅行がそろそろ終わる頃でしたので、パウロは使徒として磨きがかかり、円熟した時期だと思われます。１０節を読むとこうあります。「わたしは、神からいただいた恵みによって、熟練した建築家のように土台を据えました。そして、他の人がその上に家を建てています。ただ、おのおの、どのように建てるかに注意すべきです」と言っています。この熟練した建築家という表現がいいですね。なかなか言えるものではありません。話は飛びますが、東京の帝国ホテルは有名ですが、このホテルはライトというアメリカ人の建築家によって建てられたそうです。その時の基礎工事は大掛かりだったということです。地面を岩盤まで掘らせて土台を据えたので、工事関係者の苦労は並大抵ではなかったということです。ホテル側の人たちも基礎工事に大変な時間とお金がかかったので驚いたそうです。ところが１９２３年（大正１２年）９月１日に関東大地震が来た時、東京の大部分の建物は崩壊したけれど、そのホテルだけはびくともしなかったそうです。壁にひび割れ一つも入らなかったそうです。まさに、土台がしっかりしていたからでした。土台がなければ家が建たないのは、伝道する時も教会形成をする時も同じであって、土台がなければ伝道活動は成り立たないのです。パウロはまず何よりもしっかりした土台を築くことに全力を尽くしたのでした。この土台は言うまでもなく、信仰の土台、イエス・キリストの土台です。けれど、そういうことは頭ではわかっているけれど、案外、難しいのではないでしょうか。キリスト者は人間ですから、つい、人間を土台にしがちです。有名人に頼ったり、お金持ちに頼ったりしがちではないでしょうか。パウロは、イエス・キリストを無視して、他の土台を据えることは出来ません、と明言します。１２節からパウロはどのようなことを言っているのでしょうか。それは、主イエス・キリストという土台の上に金や銀、宝石、木、草、わらといった材料で家を建てる時、もし、火事が起こったら、木や草やわらは燃えてしまうけど、金や銀、宝石は燃えないで残るでしょう。この場合の火事は、かの日、に起こる審判の日なのです。そして、それぞれの材料は信仰者を指すのではないでしょうか。審判にあっても主イエス・キリストの信仰を固く保っている人は、金や銀、宝石にたとえられ、後の人は裁かれると言っているのです。パウロはこのコリント書を書いた約 10 年後に殉教しています。ですから死を身近に感じていたのです。同じころ執筆された「ローマの信徒への手紙」にこのような言葉があります。「世は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身につけましょう」（ローマ１３：１２）と言っています。パウロはこの世の終末が近づき、最後の審判がもうすぐ来ると考えていたのですから、その日になれば、燃えないで残っている材料は良い家であり、燃えてしまえば損失を受けてその家は評価されないと言っています。１５節は難解な御言葉です。「燃え尽きてしまえば、損害を受けます。ただ、その人は、火の中をくぐり抜けて来た者のように、

救われます」と言っています。このくぐり抜けるという意味は一般の火事で火災の中から命からがら逃げのびた人のようだと言っているのです。損害を受けるとありますが、土台の上に建てた仕事が残れば報いを受けるけれども、残らなければ損害を受けるのです。

私は今、ある本を読んでいます。『教会役員ハンドブック』という本です。お読みになった方もおられると思います。楠本史郎先生という牧師が書かれた本です。その先生はある日問われたそうです。「先生、なぜ教会に総会とか役員会とかがあるのですか？ これでは会社やこの世の団体と同じではないですか。皆が同じ主イエス・キリストを信じ、謙遜な心になっていれば、そんなもん必要ないでしょう？」と言われたそうです。「そんなものがあるのは、教会が純粋な信仰の群れでなくなったからではないでしょうか。初めの教会は組織など持たず、信仰だけで集まっていて純粋だった。それが理想の教会ではないのか」と言ったのです。楠本先生はこう言ったそうです。「しかし、その場合実際には中心になる人がいて、その人の考え方が全体を支配することになりかねません。考えの違う人はそこを出ていくほかありません。それで教会はいいのしょうか。いいえ、教会は復活の主イエス・キリストのみ体です。主がそのかしらでおられます。牧師であろうと、役員や有力な信徒であろうと、決して誰か 1 人のものではありません。主のものです。ですから、教会は主の御心に従います」と答えたというのです。では実際にはどうしたら主の御心が分かるのでしょうか。誰に聞けばいいのでしょうか。牧師でしょうか？ 教会生活の長い人でしょうか。或いは、信仰の深い人でしょうか。「教会は 2000 年にも及ぶ長い歴史の中でこのことを真剣に考え求めてきました。そこで得た結論の 1 つは、教会総会や役員会を組織し、その会議の決議を持って主のみ心とするということです。教会には規則があります。更に、日本基督教団の信仰告白と教憲教規及び諸規則があります。それに基づいて、教団や教区の組織が出来ている。各教会の役員会もその中に位置づけられている。これらがあるのは主のみ心を聞き取り、それに従って教会を治めるためです」と言われました。そして、さらに言われました。「なぜ教会に規則があり、制度と組織があるのでしょうか。それは第一に教会は完全ではないからです。どんなに集まる人が多く立派に見えても、教会には限度と欠点があり不完全なのです。理想の教会を地上に作ることは出来ません」と言われました。本当に私もそう思います。ある牧師は言われました。「教会は神の国そのものではなく、神の国の写しだ」。納得です。でもそのような不完全な教会でも、聖餐式が守れる教会は、教会なのだとカール・バルトは言いました。七里教会はコロナ禍ではあっても、イースター礼拝とペンテコステとクリスマスに聖餐式があるので感謝です。これから少しづつ多くなるといいですね。

申命記に「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である」とあります。そのような不完全な民を神は愛してくださり、地上に集められました。神は教会を愛してくださっているのです。ですから、自分たちを律する規則と制度・組織が必要なのです。

キリスト者として天にあげられた人たちは、御生前一生懸命教会に仕えられました。そのことは後輩の私たちは知っています。その道筋を辿って私たちも一生懸命歩みたいと思います。

ところで、異邦人の救いをパウロはどのように考えているのでしょうか。永眠者のお名前を見ると必ずしも全部の人がキリスト者ではないのです。つまり、異邦人です。パウロは「ローマの信徒への手紙」でこのように言っています。2章１１～１６節を読むとこうあります。「神は人を分け隔てなさいません。律法を知らないで罪を犯した者は皆、この律法と関係なく滅び、また、律法の下にあって罪を犯した者は皆、律法によって裁かれます。律法を聞く者が神の前で正しいのではなく、これを実行する者が、義とされるからです。たとえ、律法を持たない異邦人も、律法の命じるところを自然に行えば、律法を持たなくとも、自分自身が律法なのです。こういう人々は、律法の要求する事柄がその心に記されていることを示しています。彼らの良心もこれを証ししており、また心の思いも、互いに責めたり弁明しあって、同じことを示しています。そのことは、神が、わたしの福音の告げるとおり、人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して裁かれる日に、明らかになるでしょう」と言っています。大変長く引用しました。律法を実行する者が義とされる。異邦人であっても知らないで律法を自然に守れば義とされる。人が救われる、救われないということは、やがてかの日が来た時イエス・キリストによって明らかになる、と言っているのでしょう。これは大変含み多く、人の救済を広い視野で、公平に見ていると感じました。今朝は在りし日、一生懸命生きられた方々を覚え、そのような方々によって命がつなげられたことを覚え感謝の礼拝でした。